

全国科学博物館協議会

全科協

vol.46 NO.6 *News*

平成28年11月1日発行 通巻第271号

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898

<http://jcsn.jp>

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

特集「いち押し！サイエンスグッズ」

Contents

P2 ▶ 特集 | P10 ▶ 海外博物館事情 | P12 ▶ 11月12月の特別展等 | P14 ▶ リニューアル情報 | P14 ▶ トピックス

いち押し！ サイエンスグッズ

サイエンスグッズは今後、科学系博物館にとって魅力あるものになるのだろうか。実際にサイエンスグッズに携わる、博物館友の会スタッフ、研究者、イベント主催者という立場の異なる3人の実践者に“現場の声”とグッズの可能性について言及していただきました。四半世紀を超えるグッズ開発史、学芸員や研究者とグッズのかかわり方、博物館ショップやイベントでのグッズ販売の際の意外な反響と運営上の工夫など、いずれも貴重な報告です。え!? そんなものが売れるの? と驚くべき現実を目の当たりにすると、各館の収蔵品もアイデアの宝庫に見えてくるでしょう。サイエンスグッズは単なるモノではない、という実践者たちの共通したメッセージが届きますように。

本誌編集委員：畠山 泰英

大阪市立自然史博物館のグッズ開発史とヒット作

認定NPO法人大阪自然史センター（はくらボ） 西澤 真樹子

はじめに

大阪市立自然史博物館友の会は、1955年5月に大阪市立自然科学博物館後援会として誕生し、今年で創立61周年となる。2001年には法人格を取得、自然史知の集積と普及を通して社会に貢献する「特定非営利活動法人大阪自然史センター」（以下、大阪自然史センター）として独立した団体となった。2014年には、国内でも数少ない自然史系の認定NPO法人として大阪市の認定を受け、友の会事業、普及教育事業、出版事業、他館の指定管理運営、自然環境保全に関する調査・研究、そしてミュージアムグッズの開発と販売を手がけるミュージアムサービス事業など、博物館と長年培ったパートナーシップを生かしながら、社会と自然と博物館をつなぐさまざまな事業を展開している。

ここでは、大阪市立自然史博物館のグッズ開発の歴史を博物館友の会の歴史とともに紹介しながら、発売から10年を経過しても売れ続けているロングセラーを中心に、生まれたグッズについて開発の経緯とこだわりのポイントを具体的に紹介する。また、グッズがあつてこそ展開できたさまざまな新しい事業についても紹介する。

手探りと手作りの第1期（1989～2001年）

大阪市立自然史博物館は1950年11月の開館当時、館長も学芸員も採用されていたものの、専用の建物はなく市立美術館の間借りからはじまった。廊下に2つ並べたキャビネットが最初の展示であったと聞く。資金難のため、月刊誌「Nature Study」の発行も自力ではまかなえず、博物館友の会支援で発行された。執筆は友の会会員と学芸員、編集は学芸員、友の会の予算で発行という体制が作られ、現在も継続している。学芸員は、友の会の協力のもと博物



図1. ミュージアムグッズとはくらボのスタッフたち（2016年3月）

館活動を行う、という関係はこの頃からはじまっていた。

【当時のグッズ】ミュージアムグッズ発売は1989年1月開始。制作したのはラスターバッジ、タイバー、タイピン、バッジとなっている。残念ながら私はタイピン以外の実物を見たことがないのだが、「海外の博物館に行くときにお土産になるようなものが欲しい」という話になって制作した、という話を元学芸員に聞いたことがある。ラスターバッジは、いわゆる手作りで作れる缶バッジで、これは友の会の会員からデザインを集めて投票し、上位に入ったものを商品化する方法で作られた。その後、1992年にフィールドノート（KOKUYOの既製品に持ち物や自然観察の服装、緊急連絡先などを印刷したもの）を発売。1994年に友の会評議員のデザインによる友の会オリジナルTシャツ、1995年には学芸員の図案によるバンダナ販売と、毎年1種類ずつ商品を増やしていったようだ。

本格的なショップ運営開始とグッズ開発の第2期

（2001～2007年）

2001年に新しく「花と緑と自然の情報センター」が完成。

ミュージアムショップの店舗スペースができ、友の会はこの運営を任されることになる。来館者の利用に供するとともに、収益を上げ、人件費などの経費をまかないながら運営していくことが期待された。博物館は自然への入り口になるべきという考えから、鉱物や化石など標本そのものは販売せず、「手段と知識を提供する」をモットーに観察用具・標本作製用具、一般の自然系書籍も大幅に増やし、品揃えを充実させた。

【当時のグッズ】2002年発売「虫へんTシャツ」、2005年発売「てんとう虫シール」、2006年発売「セミ下敷き」、2007年発売「蛸手ぬぐい」「アブラゼミの羽柄ハンカチ」が代表的。「虫へんTシャツ」は「Nature Study」1996年4月号の表紙として制作された図案をTシャツに転用。数えきれない程増版を重ね、累計で1,000枚以上を販売している。「てんとう虫シール」は斑紋の違う実物大のナミtentウを48匹ならべたシールで、博物館発行のミニガイド『大阪のtentウムシ』（1995年初版）のカバーデザインを元に、伊丹市昆虫館の奥山清市さん（現同館館長）と共同企画・制作されたものだ。「セミ下敷き」は大阪府下の全種の抜け殻の見分け方をまとめたものである。これらはすべて昆虫研究室の初宿学芸員がデザインしたもので、改訂を経て常に根強い人気を誇るロングセラーである。

2004年開催のイベント「大阪自然史フェスティバル」でスタッフのユニフォームとしてオリジナルTシャツを制作販売したのをきっかけに、企画展にあわせグッズを制作する動きが定着。2004年からショップ店員によるブログ、mixiなどSNSを通じた現場からのグッズ紹介も開始。アイテム数が増えるにつれ売上も伸びていった。

より大阪自然史らしいショップへ 第3期(2007～2015年)

さらなる販路拡大とサービスを目指し、2007年にネットショップをオープンしてからは、来館しなくてもオリジナルグッズが入手できるようになりファン層の拡大につながっていく。店頭でも、博物館ファンであり、グッズに対して目が利く現ショップ担当が品揃えの見直しを行い「玉石混淆生きもののデザインの商品がある店頭」から「自然や生きものをよく理解して作られ、そのおもしろさを伝える商品がぎっしりならぶ店頭」へ徐々に切り替えていった。質の高い個人作家の作品や、一般書店で入手できない地方の自然系の雑誌も仕入れた。2011年にはショップの公式Twitter、2013年からは公式Facebookページがスタートし、「カエルグッズ

フェア」や「オリジナル書籍の出版」などの情報を随時更新している。

2011年の東日本大震災では、大阪自然史センターや博物館本体で支援活動が展開されたが、ショップでも、東北での活動への指定寄附ができる「東北応援バッジ」を作成。東北の博物館施設や地域から商品を仕入れ、バッジと組み合わせで寄附つき商品として販売した。本拠地の博物館にこだわらない品揃えは、ミュージアム業界全体を、グッズを通して応援したいという私たちのコンセプトにもつながっている。

2015年からは学会や生きもの系デザインの販売イベント「いきもにあ」（p.7参照）や、センタースタッフの講演会とセットで物販を行うなど、館外での出張販売の機会を増やし、実店舗とあわせて収益を上げていった。

【近年のグッズ】「大漁旗風 磯の帯状分布手ぬぐい」「淀川水系・藻屑蟹双六手ぬぐい」「哺乳類 外部計測・頭骨計測手ぬぐい」などシリーズが増加。寿司屋の湯のみ風で人気の漢字Tシャツから作った本当の湯のみ「虫へん湯のみ」「鳥へん湯のみ」や、動物の骨格のシルエットがならぶセロハンテープ「ホネテープ」は、一般的なオリジナルグッズであるマグカップやマスキングテープではないところが話題となり、店頭はもちろんネットショップでの反応も非常にいい商品である。「ホネテープ」の最低ロットは500巻近く、在庫の劣化が心配されもしたが、発売から半年足らずで売り切るヒット商品となっている。その後、古生物をデザインした第2弾「ホネテープ 絶滅版」も登場した。

店舗のないショップ運営と「はくラボ」第4期(2016年～)

ショップは毎年の公募入札で事業者が決まる。2016年2月、大阪自然史センターがこの入札に負け、15年のショップ運営の歴史にいったん幕を閉じることになる。3月末、SNSに「運営者変更のお知らせ」が流れると、閉店を惜しむツイートが多数寄せられた。4月に入り新運営者の店頭を訪れた利用者が感想をさらに投稿。関連ツイートとりまとめサイトTogetterの掲載ページは10万view超となる。自然科学系では異例の注目度で、5月には博物館のホームページに現ショップに対する公式見解が掲載されるまでとなった。

この“事件”は結果的に、大阪自然史博ショップのファン層の生の声を具体的に聞く機会となり、大阪自然史センターの知名度も一気に高めた。落胆していた現場は大いに

勇気づけられ、注目されている今だからこそ活動を続け、新商品の制作も続行してこの期待に応えるべきだ、と方針を固めた。ひろく博物館とコラボする団体でありたいとの願いを込め、スタッフ投票で愛称「はくらボ」も決定。現在は、出張販売や全国のミュージアムショップへの委託・卸販売を通して活動を続けている。

【今年のグッズ】2016年に制作した商品は「マチカネワニTシャツ」（全国展開できるようこれまでつけていた大阪自然史博のロゴを外した）、特別展にあわせた「ナウマンゾウアルミマウンテンボトル」、そして「頭骨スタンプ」「けもの歯バンダナ」、盛口満さんのイラストをデザインした「たまごトートバッグ」など。店舗がないのに次々グッズを作る、その驚きがさらに注目につながり、売上は好調である。

グッズに息を吹き込む

2016年4月に岐阜県的美濃加茂市民ミュージアムで開催された「驚きとこだわりのミュージアムグッズ展」には、全国のミュージアムグッズの展示とともに、市民から持ち寄られたグッズを展示していく「わたしの愛するグッズたち」のコーナーがあり、グッズにまつわるエピソードも添えられていた。中には何十年も前に一度だけ訪れた海外の博物館で購入されたグッズもあり、そこに記された記憶の鮮明さに驚いた（個人的には、フランスのケ・ブランリー美術館のフェルト製「石のぬいぐるみ」が忘れられない）。ミュージアムグッズは時間と空間を超えて、ミュージアムの存在を伝

える強い力をもっている。来館者は好奇心をもってモノを選び、何かを持ち帰る。グッズは家で大切に飾られ、話題にされ、その博物館を訪れていない誰かに手渡されたりする。つまり、グッズは博物館体験を館外に届ける大切なメッセージャーと言えるのではないかな。そして、その効果は私達が考えている以上に長期にわたるものなのかもしれない。

ミュージアムグッズに息を吹き込むのは、良いコンセプトやデザインだけではない。学芸員という専門家の目がしっかりと反映されてこそ、そのグッズは博物館の代弁者となって世の中に出て行くことができる。購入する側も、なんとなく作られたものではなく、専門家の厳しい目とユニークな視点が反映されたマニアックなグッズこそ喜んで買う。全国のミュージアムショップに、博物館のこだわりや学芸員の個性が光る、驚くようなオリジナルグッズが登場することを期待している。



図2. 観察用具やオリジナルグッズがぎっしり並んでいた店頭（2016年3月）

ダニの見方を変えるグッズたち

法政大学 島野 智之

昨日、ボルネオの熱帯雨林から帰国した。熱帯雨林では予想外のことが、たくさん起きる。日中の暑い時間に、森の中で汗をかいている、ハチが汗に無数に集まってくる。

驚くが、針がないので刺さないと安心して。しかし、枝に巣を作る小さなハチに気づかないと大変だ。体長1cm程度のアシナガバチの集団に襲われることになる。

Panasonic

バナソニックだから、可能なソリューションがある。

Core Products
Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution
マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

apan

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー
詳しくはホームページで panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の
標本及び模型を探しご案内いたします —

**マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m**

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8
TEL: 03-5927-8356 / FAX: 03-5927-8357
e-mail: gsc@shibayama.co.jp
<http://www.shibayama.co.jp>

何10か所と一度に刺されるので危険だ。アリも要注意だ。もっとも気性の荒いアリ達を怒らせると、集団で体のにほり一斉に攻撃を仕掛けてくる。別のアリは、鋭い顎で僕の皮膚を切り開いて、そこに尾部から放つ蟻酸を拭きかけた。傷口はまだ治らない。

キングコブラのように激しく威嚇してくる毒ヘビもいれば、木の蔓に擬態した緑の毒ヘビは脅かしても動かないので、こちらも気づかない。むしろ後者の方が怖い。

森の危険の中に飛び込む僕を突き動かすものは、まだ、見たこともないダニ達に会いたいということ。そして、出会ったダニ達の生態を知りたいということ、それだけである。

特に僕が研究しているダニは、人間に被害を与えるダニではない。森の中で、有機物を分解して、再び植物に栄養として還元する生態系の分解者ササラダニである。熱帯雨林では、シロアリとアリが大活躍をしているが、ササラダニも負けてはいない。特に赤道近くになると奇妙奇天烈な形をしたササラダニが多く見つかる。熱帯の昆虫の形もさまざまだが、体長0.5～1mm程のササラダニも、不思議な形のものが多く、この不思議な形が僕たちを魅了するのだが、顕微鏡が必要なこともあって、なかなかこの形のおもしろさは多くの人には解ってもらえない。

僕は研究者として、ダニのおもしろさは解ってもらえなくても良いのだと思っていた。しかしながら拙著『ダニ・マニア』（八坂書房刊）を上梓してみると、周囲の反応は、そうではなかったようだ。

「かわいい」「おもしろい」と言ってくれる美術家や、グッズ作家が周囲から興味を持ってくれるようになった。美術家やグッズ作家は、研究者が感じている対象動物への興味、特に研究者が密かに感じている「カッコイイ」部分には全くお構いなく、自分たちの目線でどんどん対象動物を解釈してくれる。そして、自分なりの解釈を経て、どんどん作品を生み出してくれるのだ。

そうなると、研究者側も「へえー、そんな見方があったのか」と気づかされる。制作過程では、彼らはどんどん私たちの研究分野に踏み込んできてくれて、ダニについて、こちらが二の足を踏んでいた部分や気づいていなかった部分をどんどん指摘してくれる。そうなるとおもしろいもので、負けていられなくなり、こちらもどんどん調べ物をするという具合になる。時には、プロの美術家の描いた作品に修正を加えて、線の引き方をこっちが指導したりする。もっとも、種の記載をする研究論文では、僕たちも線画を描くが、プ

ロの美術家の作品に赤を入れるのはさすがに気が引ける。

グッズ制作の実際

ダニ系統樹ポスター「ダニとその仲間たちの進化の足跡」（キウイラボ刊）は、美術家、黒沼真由美氏の作品である（図1）。黒沼氏のこれまでのモチーフはさまざまな動物であり、その形態をレース編みなどの特殊な技法を駆使して作品を創造し、海外でも高い評価を受けている。僕は学術的側面から系統樹の原図、分岐年代の確認、種の選定などをお手伝いした。

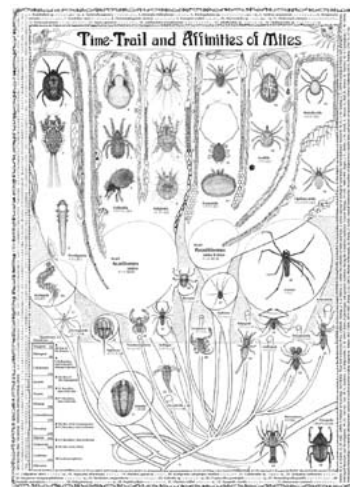


図1. ダニ系統樹ポスター「ダニとその仲間たちの進化の足跡」
黒沼真由美氏の作品。

実は、僕自身も高校生のときに美術の道を少しだけ目指したこともあるが、生物学への道を目指すことでその道は断念した。別々の道を歩いてきて、再び、美術家とお互いプロとして向かい合う時間は割と楽しい。周囲には、年齢があまり変わらない美術家が多いため、余計にそう思うのかもしれない。

当ポスターのダニの絵を描き上げるためには、300通を超えるメールとSNSチャットによる意見交換をおこなった。あるダニの絵は今でも学術的には不満足だし、別のダニの絵は心底素晴らしいと思う。しかしながら、さすがに美術家の作品で、我々の研究論文のための線画とはちがった命が吹き込まれているようだ。ポスターとなり一人歩きし出すと、黒沼氏の解釈がダニへの見方を変えさせる力を持っている。

「誰も見向きもしないダニ」の系統樹を作ったところで、何の意味があるという大方の予想を覆し、一般の方々から口々に「美しい」と言われたり、国外からも評価を得たりしている。なぜダニが美しいと言われるのか、本当に不思議なことだ！

あまのじゃくとへそまがり氏（以下、あまへそ氏）は革工芸作家として、見る者をアツと言わせる作品を作り出すこと

で、生き物グッズの業界では有名だ。緑色のエリトラ（鞘翅）の美しい巨大ゲンゴロウ、「ipod 入れ」。リュックよりも巨大なカギムシを模した2つの作品は私のお気に入りだ。あまへそ氏が“こっそり”作成されたコシミノダニには、おまわずアッと声が出た（図2）。ヤギ皮の質感が美しくこのダニにマッチし、かつ、背面の毛には針金が仕込まれていて、通常ポーズと、威嚇ポーズ（背毛を逆立てて捕食者を威嚇する姿勢）をとることが出来る。片手の上にかわいくのせることのできるサイズも“にくい”演出だ。

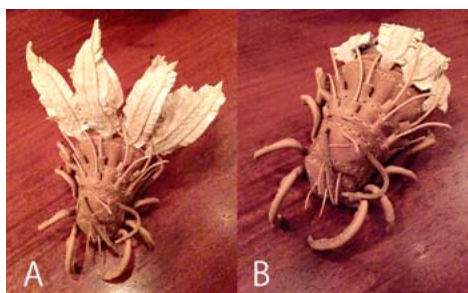


図2. コシミノダニ（ヤギの革製）。威嚇モード（A）、通常モード（B）。あまのじゃくとへそまがり氏の作品。

がまぐち屋 La Mahina（三谷美香氏）の「ダニがま口」も結構売れている（図3）。写真のオーソドックスなタイプだけではなく、オシャレながま口のラインナップは豊富だ。もともとは、「埴輪がま口」や「臓器がま口」などの作品があり、がま口だけを作成されている。僕が惚れたのは「エディアカラ紀・カンブリア紀生物のがま口」だったが、ダニが題材のがま口を本気で作りますよ、と聞いて、（ここだけの話）かなり心配だったが、人気が出たのでホッとした。



図3. ダニがま口。がまぐち屋 La Mahina（三谷美香氏）の作品。

他に「たがや」（高橋健樹氏）さんも、ダニのピンバッチを制作された。木目金という、約400年前の江戸時代の手法。金属の色の違いを利用して複数の金属を重ねあわせ、木目状の文様を創り出す日本独自の特殊な金属加工技術で、二度と同じ模様は作れない模様ができる。こんな手法で作られたダニも“しあわせ”だ。

さて、研究者、美術家・グッズ作家、そして、一般のお客さん（顧客）の三者の関係を図示してみた（図4）。

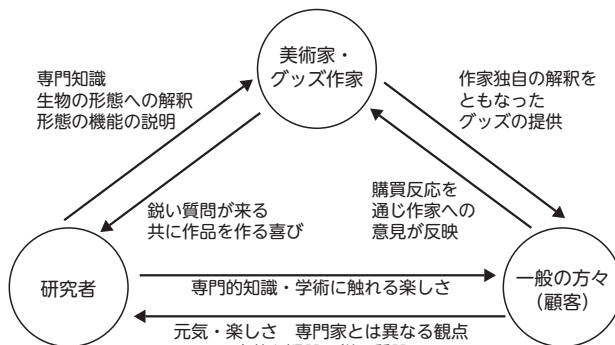


図4. 美術家・グッズ作家、顧客、研究者の関係。

ダニ類の場合、一般のお客さんは、貝類や昆虫類のマニアとはちがって、熱狂的なダニのマニアというのは見当たらない。このため、一般のお客さんは全て、非マニアである。顧客として、マニアを持たないというのは、なかなか厳しい業界かもしれないが、別の見方をすれば、完全にニュートラルに評価してもらえるので、やりがいがあるとも言えるだろう。正直、ダニのグッズが売れるなんて思いもしなかったのだから。美術家やグッズ作家の慧眼に改めて敬服する。

ダニ学者の立場から言うと、一般の方がダニグッズを買ってくれても、買ってくれなくても何の関係もない。実際、僕は今のところグッズについては一切、金銭や売買について直接には関わっていない。今後、研究費を確保するためクラウドファンディングなどに関わるが出てくるかもしれないが、今のところは、グッズ販売から利益を得たり、それ

包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用 4 K テレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、『8 K』の投映解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全に映し出します。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

BINOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp/>

Prosperity Partner

NOMURA

世界に、歓びと感動を

株式会社 乃村工藝社

本社：東京都港区台場 2-3-4 TEL：03-5962-1171(代表)

を研究資金にはしていない。

研究者がグッズを作る理由

さて、それでは何のために、グッズや美術作品の制作に関与しているかというと、少しでもササラダニや、ダニの生息する自然のことを広く一般の人たちに知っていただきたいからである。

自分のことを考えてみる。子供の頃、「野生の王国」というテレビ番組を見て育ったように思う。アフリカのキラキラした野生動物の世界。ジャングルに踏み行くと大蛇を捕獲する、あるいは、不思議な昆虫たちと出会う旅。毎回さまざまな野生動物が出てきた。今でも、熱帯雨林などという言葉に突き動かされるのは、このテレビ番組などに影響され、手つかずの自然への憧れがあったからだろう。しかしながら、昨今の開発と経済活動により、自然がいまだに破壊され続け、手つかずの自然の中でしか生きていけない動物達は、本当に地球上から姿を消す寸前ではないかと思う。ヒトと動物が地球上で共生していけるのかというテーマは、テレビ番組「野生の王国」でとりあげた課題ではなかったか。番組が終了して30年以上たった今、自分が生物学者になったときに、やはり、ヒトと動物が地球上で共生していける社会を作りたいと素直に思う。

「ダニの見方を変えるグッズ」は、言ってみれば、地球上においても取るに足らない生き物も、生態系の中では生きているのだという、僕たち生物学者と美術家やグッズ作家の“チーム”からのメッセージでもある。

一般のお客さん達には、「かわいい」「変～」と言いながらでも、それを手にしてもらえることで、瀕死の手つかずの自然には、人知れず地球上から姿を消そうとしている生き物が沢山いることを、少しでも解ってほしい。だから、お客さんはマニアでなくてよいのだ。

生き物グッズを持って、街を歩いている若い学生をたまに見かける。わきに抱える布製のバッグには、目を引くワンポイントの奇妙な昆虫が描かれていて、その中には、奇妙なダニが描かれた小物入れがある……。意外にもこれがオシャレなのだ。極限環境で泥だらけになり、時には命をかけて生き物を追い求めて研究する生物学者の実態とは、かけ離れている彼らのスタイル。でも、なぜか嬉しいのは、伝えたい気持ちが僕らにあるからかもしれない。彼らの小物入れに奇妙なダニが、またひとつ増えるように願いながら、僕はまた、次の熱帯雨林にダニを求めて、旅に行く計画を立てている。

生きものの好きが集まるイベント『いきもにあ』

いきもにあ実行委員長／切り絵作家 いわた まいこ

はじめに

ここ数年、生きものをテーマにした物販イベントが全国各地で多数開催されるようになりました。街角の小さなギャラリからデパートなど量販店の催事場、もっと大きいホールなどのイベント会場で、「キノコ」「インコ」「ネコ」「爬虫類」などにテーマを絞ったものや、「生きもの全部」をテーマにしたものなど、ライトな「生きものの好き」からマニアックなファンまであらゆるニーズに応える形で開催されています。

そんな中、筆者が開催にかかわったイベント「いきもにあ」は2015年12月12日、13日の2日間にわたって京都市勧業館みやこめっせで開催され、2日間で3,300名の来場者があり大盛況のうちに終わりました。「いきもにあ」とはどのようなイベントだったのか、またどのような工夫をしたのかを紹介します。

「いきもにあ」開催の経緯

2013年、大規模なクリエイターイベント「デザインフェスタ」の出展公募に申し込んだものの抽選でたくさんの「生きもの系」クリエイターが落選してしまう、という出来事がありました。SNSのひとつであるTwitterで作家たちが嘆きあっていたところ、現いきもにあ実行委員会メンバーの一人が新しく生きものをテーマにしたイベントを作ることを提案、その他有志が集まり、「生きものまーけっと実行委員会」が結成され、その年の11月、東京・浅草橋にて「生きものまーけっと（略称：なまけっと）」が開催されました。会場には生きものをテーマに創作活動または研究を行っている個人や団体が約100組集まり、ブース形式で作品の販売や研究の発表を行いました。また、「かわいい」だけじゃない生物の多様な魅力を伝えたい、というテーマを実現さ

せるべく、イベントの目玉として生物研究者による講演会も行いました。研究者から直接話を聞くことができる貴重な機会に、立ち見が出るほど聴衆が集まり好評を博しました。初めての開催にもかかわらず約1,300名の来場者があり、会場内は混雑で一時入場制限をかけるほどでした。

その後、第2回の開催を待ち望む声に応える形で、新たに有志（メンバー構成は作家や会社員、主婦など、研究やイベント運営に関して全くの素人）が集まり実行委員会を結成し、名称を「いきもにあ」にリニューアル。場所を京都に移し開催が実現しました。

「いきもにあ」では、2日間で161組（うち153組が販売、8組が展示のみ）の出展者がそれぞれブースを出し、展示販売や研究の発表を行いました。出展者の多くは生きものをテーマに創作活動を行っているクリエイターですが、中には博物館関係の団体、研究機関、動物園、大学のプロジェクトチームなどの参加もあり、多彩な顔ぶれが揃うことになりました。また、同じ会場内にスクリーンを設置し、生物研究者を招いての講演会も行いました。

イベントを皆で盛り上げる工夫

当イベントでは、各種告知や広報をSNS（主にTwitter）中心に行いました。SNSの性質上、人気のある出展者などから情報が多方に拡散しやすく、低コストで効率良く広報できるうえ、来場者がどんなことに期待し、どの出展者が人気があるか、などの反応を直に知ることができイベント運営の参考に大変有用でした。また来場者も「いきもにあ」について「つぶやい」たり情報拡散に協力したりすることで開催前から参加し共に盛り上げることができるのです。ちなみに会場内に設置したアンケートの「『いきもにあ』を知ったきっかけ」の集計では、60.7%が「Twitter」でした（図1）。

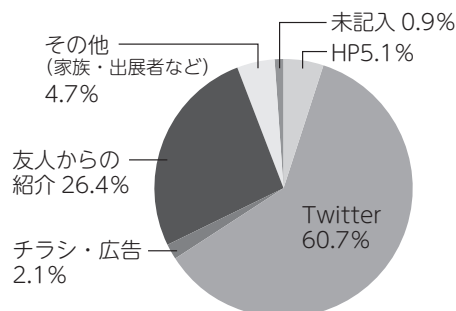


図1

また、普段はシステムエンジニアをしている実行委員からの提案で、公式Webサイトにもイベントを盛り上げる工

夫を施しました。それぞれの出展者の作品や商品などの出展内容を紹介する「出展者紹介ページ」（図2）を設けたのですが、このウェブページは出展者自身が自分専用のページにログインし編集できるようになっているので、好きなタイミングで写真や文章をアップロードし告知することができるのです。閲覧者側から見ると、SNSで「紹介ページの情報を更新しました」と出展者側からたびたび告知されるので、開催まで常に新しい情報を受け取ることができ便利うえ、イベントへの期待値も高まります。また事前に買い物ルートや予算を検討することができるため、かなり綿密に「予習」をし計画的に会場を回った来場者もいたようでした。



図2

当イベントが（「なまけっと」という前身があったにせよ）初回にもかかわらず3,300名もの来場者があったのは、これらの工夫が功を奏したことも大きいのではないかと考えていますが、今後イベントを大きくするには、SNSを利用しない層をどう引き込むかを検討しなければなりません。

かわいい？気持ち悪い？個性的なグッズたち

次に、各ブースにはどんな「グッズ」が存在したのかを紹介し

まず生きものごとのフロアを占める割合ですが、爬虫類が最多、次に海に棲む生物（哺乳類以外）。ウミウシ、クラゲが多い、その次に鳥類、昆虫類、陸生哺乳類と続きます。その他、古生物、海生哺乳類、菌類、棘皮動物、植物、微生物（プランクトンなど）……。

当イベントでは、不思議なことに他ではあまり売れない「人気のない」生物のグッズがよく売れました。例えば「マンボウなんでも博物館+」の、マンボウの発生過程を描いた真っ赤なTシャツや、布ものブランド「aosansyo」の、深海をただよう白いクラゲを見事に表現した「クダクラゲタ

イツ」など……。その他、列挙するときにがないので割愛しますが、このようなマニアックなグッズたちが面白いように売れていくのです。おそらく世間一般から見ればニッチにもほどがあるラインナップですが、「いきもにあ」ではマニアックであればあるほど人気が出る傾向にあります。

もちろん、「いきもにあ」にも世間一般から見ても「かわいい」生きものもたくさん存在します。例えば、開場後早々に長蛇の列ができた人気ブース「レフトシンプル」の「シマエナガがま口」は本物と見紛うばかりの愛らしい質感。羊毛フェルト作家「URBAN SAFARI」の赤ちゃんアザラシのアクセサリーなどはかわいくて思わず頬ずりしたくなるほどでした。

このように当イベントに集まるグッズたちは、マニアック度の振れ幅が至大です。しかし、全てに共通して「生きものへの敬意」に満ち溢れているのです。そしてそれは出展者と同様の敬意を持つ来場者の目によってより洗練されてゆき、イベントとともに成長していくのではないかと思います。

物販ブースの真横で講演会

会場内には講演会のスペースを設け、研究者の講演会を開催しました。5名の生物研究者に、それぞれの研究分野について生物学初心者にも親しみやすく、しかも知的好奇心をくすぐるツボを押さえた講演を行っていただきました。100席設けましたが全ての回で満席。立ち見席もいっぱいになり、スクリーン前の地べたに座ってもらうなどの対応をしました。聴衆はブースで手に入れたグッズを抱え、目を皿のようにして聴き入っていました。博士の皆さんからも「学会などと全く違う雰囲気だと思いのほか楽しかった。一般の人がこれほど興味を持って聴いてくれると励みになる」と好評でした。

展示販売ブースと講演会場を同じフロアに設置し、あえて「ごちゃ混ぜの空間」を作ったのには訳があります。グッズ目当ての来場者が講演に参加して生物の別の面白さに気づいたり、講演目当ての来場者がふらっと販売ブースに立ち寄り気がつくと両手いっぱいのグッズを手にしていたりといった、興味の幅を広げるきっかけになるのではないかと考えたからです。

クリエイターと研究者のコラボで生まれるグッズ

また、講演会を行ったことで新たなグッズが誕生する、という出来事もありました。

図鑑や水族館・博物館等で生物のイラストや漫画を制作しているイラストレーター安斉俊氏のブース「箱庭動物園」で誕生したのが、安斉氏自ら講演者であるハリガネムシ博士こと佐藤拓也氏に監修を依頼し製造された「濃い味緑茶ティーバッグ『蟬螂』」(図3)。パッケージやティーバッグの持ち手には安斉氏の考案した、ハリガネムシを擬人化したキャラクター「ハリガネムシ子ちゃん」が描かれています(中身は普通の美味しい緑茶)。今回のコラボをきっかけに、佐藤氏とは今後クラウドファンディングなどを利用しハリガネムシの研究の支援としてグッズ制作や啓蒙活動をしていく予定だそうです。



図3

このように、クリエイターと研究者が手を取り合って新しいグッズを生み出すきっかけとなれたことは主催者冥利につきますし、今後もこのような例が増えていくのではないかと期待しています。

まとめ

これまで述べてきたように、「いきもにあ」は主催者、出展者、来場者、クリエイター、研究者、学生、会社員、さまざまな立場の人たちが「ものすごく生きものが好き」という共通項だけで集まり、準備の段階から開催まで共に作り上げてきたイベントです。「いきもにあでグッズを購入する」という行為は、物販イベントでの単なる「買い物」であるにとどまらず、そのような経験をたくさんの「生きもの好き」たちと共有した「参加証」を手に入れるということなのかもしれません。

「いきもにあ」では今後も、これまで交わることのなかった人たちが「生きもの」を中心に出会い、そこから何か面白いものや新たな好奇心の芽が生まれるようなイベントを目指していきたいと考えています。また、それが少しでも多くの「生きもの」や自然史博物館などのファンを増やすことに繋がるよう願っています。



■ 企画展・特別展

海洋汚染展を、ノルウェー海事博物館で開催

ノルウェーの首都オスロのノルウェー海事博物館で、海洋汚染をテーマにした企画展が2016年5月7日に開幕した。同展では、海洋汚染、とりわけプラスチックによる海洋汚染の実態を明らかにし、海洋生物への影響、そして人間社会への影響を明らかにしている。

会期：2016年5月7日～2017年1月31日。

Hope for the Sea?

Norwegian Maritime Museum, Oslo.

[http://www.marmuseum.no/no/utstillinger/skiftende_](http://www.marmuseum.no/no/utstillinger/skiftende_utstillinger/d25-Tg7bI4p.ips)
[utstillinger/d25-Tg7bI4p.ips](http://www.marmuseum.no/no/utstillinger/skiftende_utstillinger/d25-Tg7bI4p.ips)

気候変動展を、マンチェスター博物館で開催

イギリスのマンチェスター市にあるマンチェスター博物館（マンチェスター大学博物館）で、気候変動をテーマにした企画展が2016年5月11日に開幕した。同展は、マンチェスター大学のティンダル気候変動研究所と、気候変動に取り組むマンチェスター市独自の政策プロジェクト「Manchester: A Certain Future」とともに企画・制作された。

会期：2016年5月11日～9月4日。

Climate Control.

Manchester Museum, The University of Manchester.

[http://www.museum.manchester.ac.uk/whatson/](http://www.museum.manchester.ac.uk/whatson/exhibitions/climatecontrol/)
[exhibitions/climatecontrol/](http://www.museum.manchester.ac.uk/whatson/exhibitions/climatecontrol/)

女性写真家展を、カーネギー自然史博物館で開催

アメリカのピッツバーグ（ペンシルベニア州）のカーネギー自然史博物館で、いま世界で最も注目を集める11人の女性写真家の作品を集めた写真展（巡回展）が2016年9月24日に開幕した。作品が紹介された写真家は、マギー・ステイーバー、エリカ・ラーセン、ジョディ・コップ、ダイアン・クック、リンジー・アダリオ、ビバリー・ジュベール、ステファニー・シンクレア、キトラ・カハナ、エイミー・トンシング、リン・ジョンソン、キャロリン・ドレイク。

同展は、ワシントンDCに本部を置くナショナル・ジオグラフィック協会によって企画・制作され、同協会が運営するナショナル・ジオグラフィック博物館での開催（2013年10月11日～2014年3月9日）を皮切りに、クランブルック科学博物館（ミシガン州）、ファーンバンク自然史博物館（ジョージア州アトランタ市）、フィールド自然史博物館（イリノイ州シカゴ市）等、アメリカの代表的な科学系博物館を巡回してきた。作品は、この巡回展のために展覧会図録として制作された写真集に収録され、その日本語翻訳『ウーマン・オブ・ビジョン ナショナルジオグラフィックの女性写真家』が日経ナショナルジオグラフィック社から2014年に発行された。

会期：2016年9月24日～2017年1月8日。

Women of Vision: National Geographic Photographers on Assignment.

Carnegie Museum of Natural History, Pittsburgh, PA.

[http://www.carnegiemnh.org/exhibitions/women-of-](http://www.carnegiemnh.org/exhibitions/women-of-vision/)
[vision/](http://www.carnegiemnh.org/exhibitions/women-of-vision/)

「人種：わたしたちはそんなに違うのか？」展が、米国各地の科学系博物館で巡回中

人種差別をテーマにした巡回展が、白人による黒人差別が今も色濃く残るサウス・カロライナ州の州立総合博物館（コロンビア市）で開催された。

メディアで報道されている通り、現在のアメリカでは人種対立が激化している。日本でも、その行方を固唾を呑んで多くの人が注視している。サウス・カロライナ州立博物館で開催された「人種：わたしたちはそんなに違うのか？」展は、そうした状況を背景につくられ、2010年にカリフォルニアのローレンス科学博物館（Lawrence Hall of Science）を皮切りに、アイオワ科学館等、全米各地の科学博物館で巡回している。企画・制作は、ミネソタ科学博物館。

会期：2015年10月10日～2016年4月3日。

Race: Are We So Different?

South Carolina State Museum, Columbia, SC.

<http://scmuseum.org/wp-content/uploads/2016/05/State-Museum-Announces-New-Blockbuster-Exhibit-RACE-Are-We-So-Different.pdf>

「道路の野生動物」展を、エストニア道路の博物館で開催

エストニアの南東部のボルヴァ県ヴァルブス村にあるエストニア道路の博物館で、「道路の野生動物」（道路で被害にあう野生動物）が開催された。同展では、森が多いエストニアの道路で頻発している野生動物の交通事故を取り上げ、問題の解決を観覧者に訴えた。

会期：2016年6月1日～9月30日。

Animals on the Road.

Estonian Road Museum, Varbuse.

<http://www.maanteemuuseum.ee/en/content/%E2%80%9CAnimals-road%E2%80%9D>

「日本の畳」展を、ロッテルダムの建築博物館で開催

オランダのロッテルダムにある建築博物館「ヘット・ニュー・インスティテュート」（1993年開館）で、日本の畳を紹介した企画展が2016年9月13日に開幕した。「Platform: Body/ Space」と題した同展は、古今東西の人間の生活で用いられているマット（マットレス）やその類似品がどんな役割を人間が営む生活空間の中ではたしているかを考察し

たものである。「ヨガのマット」「海岸で使うビーチ・タオル」「イスラム教の礼拝用のマット」「日本の畳」の四つのテーマが用意され、順次それらがテーマ展示として開催されている。

「日本の畳」の展示では、世界では類がない日本固有の住文化を構成する重要な要素である「畳」の歴史と、構造、種類、実際の使われ方と、祝儀敷きと不祝儀敷きに分けられる「敷き方」を紹介している。

全体の会期：2016年6月11日～11月15日（日本の畳展：2016年9月13日～11月15日）。

Platform: Body/ Space.

Het Nieuwe Instituut, Rotterdam.

<http://platform.hetnieuweinstituut.nl/en>

<http://www.hetnieuweinstituut.nl>

■ 廃館

英湖水地方の炭坑博物館が廃館

イギリスの湖水地方のホワイトハーヴェン市（カンブリア郡）にあるヘイグ炭坑博物館（1997年開館）が財政難により2016年1月に廃館した。

Haig Colliery Mining Museum, Whitehaven, Cumbria.

<https://www.museumsassociation.org/museums-journal/news/13012016-cumbrian-mining-museum-faces-closure>



ロッテルダムの建築博物館「Het Nieuwe Instituut」. Photo Johannes Schwartz.

11月12月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	サイエンス屋台村	11月3日
	クリスマスツリー点灯式	11月26日
	クリスマスイベント	12月10日・11日
岩手県立博物館	大津波と三陸の生き物	12月17日～2月26日
仙台市天文台	小松巧星景写真展 東北夜景	12月1日～1月31日
秋田県立博物館	企画展「四季のたのしみ ぐらしのいろいろ」	11月19日～4月2日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「ふれあい科学館と宇宙 15年のあゆみ」	9月1日～11月30日
	第16回コンピュータグラフィックス展	11月5日～1月9日
	ホワイエ企画展「オーロラミュージアム」	12月1日～2月28日
	開館15周年記念スペースパーク企画展「ブラレールフェスティバル」	12月3日～1月9日
つくばエキスポセンター	第17回全国ジュニア発明展 作品展示会	10月22日～11月20日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	外から運ばれてきた生き物たち - Youはどうして日本へ? -	10月8日～1月29日
日立シビックセンター科学館	ふしぎアートであそぼう! 2016	11月23日～12月25日
群馬県立自然史博物館	開館20周年記念展「超肉食恐竜 T.rex」 エピソードⅡ ティランノサウルスへの進化	10月1日～11月27日
埼玉県立自然の博物館	特別展「現代有用植物展～ぐらしと植物のステキな関係～」	9月24日～1月15日
国立科学博物館	特別展「世界遺産ラスコー展 クロマニヨン人が残した洞窟壁画」	11月1日～2月19日
郵政博物館	切手でみる星の物語展	9月10日～11月27日
	年賀状展 - 新年を寿ぐ -	12月10日～1月15日
神奈川県立生命の星・地球博物館	企画展「石展 Part 2 - かながわの大地が生み出した石材 -」（仮称）	12月17日～2月26日
立山カルデラ砂防博物館	特別展「火山と防災」	11月3日～12月25日
富山市科学博物館	写真展 第31回「自然から学ぶ」	11月12日～11月20日
	第37回SSP展「自然を楽しむ科学の眼2016-2017」	11月26日～12月11日
	第24回 私の身近な自然展	12月17日～1月22日
福井県児童科学館	特別企画展「宇宙への挑戦! ～日本のロケット開発～」	10月29日～11月20日
岐阜県博物館	特別展「東海地方の円空仏 ～その造形と足跡をたどる～」	9月23日～11月20日
	企画展「あなたが知らない鳥の世界」	11月26日～1月29日
大垣市サイトピアセンター学習館	カガクのトビラ「ふしぎながみ～わたなべちなつ絵本展～」	10月29日～11月27日
	みる。かんじる。うまれる絵本展	10月29日～11月27日
中津川市鉱物博物館	第20回企画展「美濃焼・瀬戸物と花崗岩」	7月23日～12月18日

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
ふじのくに地球環境史ミュージアム	企画展「静岡のチョウ 世界のチョウ」	12月10日～3月26日
ディスカバリーパーク焼津	秋の特別展「脱出！ブラック博士のひみつ研究所」	9月13日～12月4日
鳳来寺山自然科学博物館	東三河の大地にひたるジオの旅	11月1日～2月19日
豊橋市自然史博物館	第12回自然史博物館自由研究展	10月8日～11月6日
	企画展「極小昆虫と微小貝」	11月19日～12月11日
	企画展「西にちなむ」	12月17日～1月16日
名古屋市科学館	チームラボ☆アイランド 踊る！アート展と、学ぶ！未来の遊園地	11月12日～2月12日
あいち健康の森健康科学総合センター健康科学館	秋の特別展示「目指せ 金メダル～世界記録に挑戦～」	9月10日～12月4日
滋賀県立琵琶湖博物館	第24回企画展示「開館20周年記念 びわ博カルタ 見る知る楽しむ新発見」	9月17日～1月31日
京都鉄道博物館	第1回企画展「The Sleeper Train ～寝台列車の軌跡～」	10月8日～1月31日
キッズプラザ大阪	みんなにとどけ！クリスマス大作戦！～キッズサンタのプレゼント工房～	12月16日～12月25日
きしわだ自然資料館	巡回展「イチ押し！瀬戸内海の自然トピックス」	11月2日～11月29日
姫路科学館	企画展「ピカッ！ゴロゴロ 雷の写真展」	12月16日～1月23日
明石市立天文科学館	特別展「星空ウォーク～遠くをのぞくと昔がわかる!?～」	10月22日～11月27日
	特別展「2017年全国カレンダー展」	12月3日～1月9日
鳥取県立博物館	企画展「日本におけるキュビスムーピカソ・インパクト」	10月1日～11月13日
	企画展「大荒神展」	10月15日～11月6日
島根県立三瓶自然館	木のおもちゃ展	11月3日～11月27日
	第37回SSP展 自然を楽しむ科学の眼	12月23日～2月12日
広島市交通科学館	企画展「交通安全探偵団～さぐろう！交通安全のひみつ～」	10月14日～12月4日
防府市青少年科学館	防府市制施行80周年記念企画展「科学捜査展season2」	10月22日～12月4日
愛媛県総合科学博物館	パネル巡回展「月のふしぎ」	9月17日～11月27日
	企画展「永久磁石～見て！触って！学ぼう！～」	10月8日～11月20日
	企画展「地震を探る」	12月3日～1月22日
北九州市立自然史・歴史博物館	国重要文化財新指定記念展「企救の国の青銅器文化」	7月3日～11月6日
	秋の特別展「関門幕末維新伝」	10月1日～11月27日
北九州イノベーションギャラリー	実験いろいろ！おどろき体験「未来へ夢はずむ ～ゴムのちから展」	10月22日～12月23日
佐賀県立宇宙科学館	冬の企画展 西年水族館 ～とりになんだ海の生き物たち～	12月10日～2月26日
宮崎県総合博物館	賀来飛霞のみた自然と歴史 ～延岡藩と高千穂探葉記～	10月22日～12月4日

リニューアル情報

黒部市吉田科学館

〔更新箇所〕 プラネタリウム

〔更新内容〕 2016年4月、開館30周年の年に、念願のプラネタリウム・リニューアルが実現しました。

開館以来活躍している光学式プラネタリウムMS-20 ATは、オーバーホールと光源のLED化によって、より美しい星空を映し出せるようになりました。

そして、今回初導入のデジタル式プラネタリウムは、国立天文台開発の4次元デジタル宇宙ビューワー「Mitaka」の全天周立体視システムの導入に成功し、直径20m級ドームでの世界初導入例として注目を集めています。土日祝日に投映している生解説番組「Mitakaで3D宇宙旅行」では、まるで宇宙に行ったかのような、そんな気分を味わえる投映を目指しています。

また、小・中学校の天文学習には、アストロアーツの「ステラドーム・プロ」を用いて解説を行います。

今後は、「立山黒部ジオパーク」の拠点施設として、プラネタリウムを利用したジオパーク普及活動を企画していきます。黒部の大地から宇宙までを体感できるプラネタリウムをぜひ見に来て下さい。

〔更新面積〕 340.1㎡

〔公開日〕 平成28年4月29日

〔準備期間〕 平成27年12月～平成28年3月

〔担当者〕 コニカミノルタプラネタリウム株式会社



第24回研究発表大会

事例発表者の募集について

平成29年2月17日（金）に京都鉄道博物館で開催する第24回研究発表大会での事例発表者を募集します。

今回のテーマは「地域文化の核となる博物館～それを実現する資質能力」です。活発な情報交換の場となるよう、自館の取り組みや課題などは是非ご紹介ください。

応募は口頭発表、ポスター発表とも11月30日（水）までに、事務局宛メールかFAXでお申込みください。

詳しくは、10月中旬に各加盟館宛にお送りしました要項をご覧ください（全科協HP<<http://jcsn.jp/>>でも募集要項をご覧ください）。皆さまの応募お待ちしております。

魅惑のビーチ



HP <http://www.enosui.com/>

“ビーチ”といえば海水浴。陸側でも“ビーチクリーン”や“ビーチコーミング”が楽しめます。ただのゴミ拾い? いえいえ、貝がらや石などキラッと光るお宝も見つかるのです。当館のすぐ目の前は砂浜。毎月第3日曜日は“えのすいecoデー”としてこれらの活動をしています。ゴミを拾い生きものが暮らしやすい気持ちのよい環境にすると共に、宝物になりそうなものを集め、それらを手のひらサイズのコルクに貼りつければチャームのできあがり! 参加する度に作ればビーチの記録にも。みなさんも身近な海へ出かけてみませんか?



次回執筆者は、はまぎん こども宇宙科学館の櫻井英雄さんです。

新規巡回展示募集

加盟館がお持ちの資料、あるいは新規に製作する企画展示等について巡回展事業へのご提供をお願い致します。

ご提供可能な展示がある場合、またご質問がありましたらメール等で事務局までご連絡ください。皆様からのご連絡お待ちしております。

※なお本事業は、所有される資料をお譲りいただくものではありません。

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

株式会社 丹青社 2015年9月 本社を移転しました

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19階

TEL | 03-6455-8100(代表) URL | www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745

<http://www.tokyo-science.co.jp>

E-mail: info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

ASTC 年次 総会報告

次回

2017年
10月21日(土)～24日(火)
米国カリフォルニア州サンノゼ開催

ASTC (Association of Science-Technology Centers) 年次総会が、9月23日(金) から27日(火)の4日間に亘り米国フロリダ州のタンパにて開催され、北米の科学館や博物館等を中心に、世界中から1,500人近くの関係者が参加しました。

大会においては、様々な映画などでその世界観を作り上げるプロダクトデザイナーのアレックス・マクダウェル氏による基調講演や、教育・学習、展示、運営など様々なテーマに基づくセッションが100以上行われました。

コンベンションセンター内で実施された科学ショーのデモンストレーションでは、思わず聞き入る一人語りから電気を使った大迫力のショーまで、大人の参加者も大いに盛り上がるものでした。また各所にて2017年に東京で開かれる世界科学館会議への意気込みが感じられる大会でした。

今回は、2017年10月21日(土) から24日(火) まで、米国カリフォルニア州サンノゼにて開催されます。<http://www.astc.org/conference/>

(国立科学博物館 大橋 紘樹)



会場の様子



科学ショーのデモンストレーション



展示見本市



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星地球博物館主任学芸員)
杵名 貴彦(国立科学博物館理工学研究部研究員)
佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課主任学芸員)
西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部)
中井 紗織(国立研究開発法人科学技術振興機構
理数学習推進部能力伸長グループ)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津事業係長)
船木 茂人(国立科学博物館博物館等連携推進センター
博物館連携室長)

全科協事務局

国立科学博物館
博物館等連携推進センター 博物館連携室
(担当:久保・江森・森永)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcsbm.jp
発行日 平成 28 年 11 月 1 日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社